



一本柳遺跡は、宮城県北中央部の大崎低地東縁部に位置し、鳴瀬川左岸に形成された標高約100mの自然堤防上に立地する。奈良・平安時代、中世、近世の複合遺跡で、東西500m以上、南北500m程の広がりをもつ。調査は、鳴瀬川中流域堰関連工事に伴うもので、約60000m²を対象として行なった。

木簡は、中・近世の井戸が集中して検出された調査

宮城・一本柳遺跡

いっぽんやなぎ

- 所在地 宮城県遠田郡小牛田町字新一本柳・一本柳・塩釜
- 調査期間 一九九七年（平9）四月～一九九八年一月
- 発掘機関 宮城県教育委員会
- 調査担当者 山田晃弘・茂木好光・菅原弘樹
- 遺跡の種類 集落・屋敷跡
- 遺跡の年代 奈良・平安時代、中世、近世
- 遺跡及び木簡出土遺構の概要

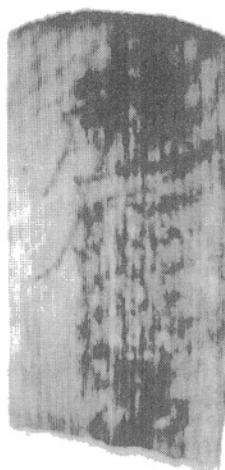
区東端部の井戸SE五四四から出土した。この井戸は長径約三田、短径二・五mの楕円形の素掘りの井戸で、深さは一・二mを測る。堆積土は未分解の植物遺体や炭化物・灰を多量に含む四枚の廃棄層とブロック混じりの人为堆積層、砂層を中心とした自然堆積層が互層をなしており、廃絶後しばらくの間ゴミ溜めとして利用されていたことが窺われる。遺物には漆器椀・皿、曲物、結桶、箸、折敷、下駄、板草履、櫛、籠、円盤状木製品、丸太材などの木製品や自然木、植物遺体（クルミ・モモ・ウメ）などがあり、大半のものが木簡と同様に廃棄層から出土した。井戸の廃絶年代は現在整理中であり確定的なものではないが、戦国時代～近世の初め頃とみられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「(符籙)

(75)×35×2 019

上端がやや圭頭状に成形された木簡で、下半は折損している。片面に符籙（「山」の下の左右に「鬼」、ついで「戸」の中に「日」が三列四段計一二、その下に「鬼」が読み取れる）が書かれていることから、本木簡は呪符とみられる。



(1-7 菅原弘樹)
8 吉野 武